

## 第十講 コリントス戦争の原因

### コリントス戦争に至る道

前 404 年 アテナイの降伏

三十人政権

ボイオティアにおける政権交代？

ボイオティアやエーリスによるアテナイ人民主派亡命者保護

前 403 年 トラシュブロスら民主派の攻勢・パウサニアス王の仲介

三十人政権の崩壊と和解の成立

前 401 年 小キュロスの反乱・クナクサの戦い

前 400 年 ティブロンのアシア派遣

前 399 年 デルキュリダスのアシア派遣

エーリス戦争（～前 398 年）

前 398 年 アギス王の死とアゲシラオス王の即位

前 396 年 アゲシラオスのアシア遠征（～前 394 年）

アウリスでのトラブル

コリントス戦争勃発についての一般的イメージ

Plut. Ages. 15. 2 :

「その時にスパルタ市民のエピキュディダスが彼の許に到着して、ギリシアの大規模な戦争がスパルタを取り巻き、エフォロイたちは彼を呼び戻し、故国を救援するよう命じていると報せたのである。「おー野蛮な害悪を工夫するギリシア人よ。」というのはいったい誰がギリシア人相互のどのような妬みやその頃の共謀や結社を他にどのように呼ぶことができるのだろうか。彼らは奥地に向かっていた幸運を手にし、夷狄に向いている武器と既にギリシアの地では根絶やしにされていた戦争を再び自分たちの方へ向けたのである。」

アゲシラオスのアシア遠征が順風満帆に推移し、ペルシアに対して大きな打撃を及ぼしている丁度その最中に、ギリシア本土で生じたコリントス戦争はその雄図を虚しくしてしまったという後世の評価を示している。こ

ここにコリントス戦争へのボイオティアやアテナイなどの同盟諸国の政策を評価しないという伝統を窺わせる。それはペロポネソス戦争後ギリシア本土にもたらされた「スパルタの平和 Pax Lacedaemonica」を覆し、再び戦乱の世に引き戻してしまったという批判的見解をここに見ることができる。さらにこのコリントス戦争を主導した政治指導者たちはスパルタに対する「妬み」によって戦争へとそれぞれのポリスを導いていき、互いに「陰謀」をめぐるして「結託」した、と動機の不純さを指摘しているのである。

Plut. Ages. 15. 6:

「というのはペルシアの貨幣の刻印は弓兵を帯びているので、アジアから引き上げるときに大王のために1万名の弓兵によって自分は撤退することになったのだと（アゲシラオスは）言った。というのはそれほどのお金のアテナイやテーバイに持ち込まれ民衆煽動政治家たちに手渡しされたために、民衆はスパルタ人に対して敵意を抱いたのである。」

先に触れたコリントス同盟諸国の指導者たちの不純さはペルシアによって買収されて戦争を始めた、というこの評価によってよく示されている。しかしこれはスパルタによって宣伝された言説で、のちのイスメニアス裁判でも戦争責任をイスメニアスに押し付け、その有罪を下すのに援用されている。

何れにせよボイオティアを初めとするコリントス同盟諸国に戦争責任があり、ペルシアに買収されてギリシア人を裏切り、国民を扇動したという言説である。後にスパルタはいわゆる「大王の平和」でギリシア人を裏切ったと批判されることになるが、汎ギリシア主義というコードが言説形成の大きな鍵となっている。

しかしペルシアに買収されてコリントス戦争を始めたという言説に対して、コリントス同盟諸国は内部に党派の間で激しい権力闘争があり、そのことがスパルタに対する不信と警戒の念を掻き立て、それがコリントス同盟諸国の指導者たちをして戦争へと傾斜させたという言説も存在している。ボイオティアの歴史家と推定される『ヘレニカ・オクシュリンクア』が伝えているのはそのような言説である。『ヘレニカ・オクシュリンクア』

の歴史家は決してイスメニアスらボイオティアの指導者らが陰謀を巡らせて戦争を主導していったことを否定しない。以下、クセノフォン『ヘレニカ』と『ヘレニカ・オクシュリンキア』の記述を見ていきたい。

二つの史料

Xen. *Hell.* 3. 5. 1-5 :

「(1) 一方ティトゥラウステスは、アゲシラオスが大王の行動力を軽蔑し、全くアジアから撤退する意図がなく、それどころか大王を引っ捕えるという大いなる希望を抱いていると考え、そのような事態にどうすればよいのか判断に苦しんで、銀 50 タラントに相当する金を与えてロドス人ティモクラテスをギリシアの地に派遣し、最も確実な保証を手にした上で、ラケダイモン人に対する戦争を引き起こすという条件で諸ポリスの指導者に提供するよう命じたのであった。それで彼は出立してテーバイではアンドロクレイダスやイスメニアス、ガラクシドロスに、コリントスではティモラオスとポリュアンテスに、アルゴスではキュロンやその党派の人々に手渡したのであった。(2) アテナイ人はその金を受け取らなかったにも拘らず、支配するのは自分たちのものだと考えて、戦争へは熱心であった。賄賂を受け取った人々は自国の人々にラケダイモン人を非難した。これらの人々をラケダイモン人に対する憎悪へと導いていくと、大国同士を互いに団結させたのであった。(3) テーバイの指導者たちは誰かが戦争を始めない限り、ラケダイモン人が同盟諸国との条約を破ろうとはしないのを知っていたので、フォキス人と彼らとの紛争地から財物に課税するよう説いたのであった。そのようなことが起こればフォキス人がロクリスに侵入するだろうと期待してのことだった。フォキス人は騙されることなく、ロクリスに侵入し何倍もの財貨を略奪したのだった。(4) アンドロクレイダス派の人々は、ロクリスは友好国であり同盟国であるので自分たちは係争地へではなく、同意された地へ侵攻するのであると、ロクリス人に援軍を速やかに派遣するようにテーバイの人々に説いたのであった。フォキス人は直ちに使節団をラケダイモンに派遣し、戦争を始めるのではな

く防衛のためにロクリス人に対して出動したのだと説明して、彼らに援軍を要請したのであった。(5) ラケダイモン人はテーバイ人に対して軍を派遣する口実を手にしたことを喜んだ、というのは以前デケレイアのアポロンへの(戦利品の)十分の一(奉納)を要求したことやペイライエウスに対して軍を派遣しようとしなかったことで彼らに対して怒っていたからである。それに彼らがコリントス人に遠征に参加しないよう問っていたことを非難していた。さらにアウリスでアゲシラオスが犠牲を捧げるのを認可せず、祭壇から犠牲獣を投げ捨て、アゲシラオスに参加してアジアへ遠征しなかったことを思い出したのであった。また彼らに対して軍を進め彼らに傲慢な振る舞いを終わらせる絶好の機会だと考えたのであった。というのはアジアにおいては彼らにとって恵まれており、アゲシラオスは優勢であり、ギリシアにおいてはいかなるその他の敵対者も彼らを妨害することはなかったからである。」

コリントス戦争に関して、エーリス戦争との類似性が注目される。戦争前のテーバイの非協力、反抗的外交がスパルタの怒りをかきたて、同盟国に対するテーバイの動員が戦争の口実とされている点である。更に戦争の結末が、テーバイの領域支配の解体と親スパルタ派政権の樹立に繋がっていることも極めて似ていると言えよう。

スパルタをペロポネソスに閉じ込めようという戦略はレカイオンを突破されて崩壊し、アンタルキダスの活躍によってアテナイは海外との交易路を断たれてペロポネソス戦争の悪夢を再来させ、ペルシアの財力はスパルタに向けられ、戦争は結局スパルタの勝利に終わってしまった。

史料としてのクセノフオンの特徴。当該国に対するスパルタ人の反感の存在。

スパルタの認識ではなく、プロパガンダ

各ポリスの内部事情を無視。

*Hell. Oxyrh.* 13. 1-5 :

「(1) アンドロクレイダスとイスメニアス派の人々は国民をラケダイモン人に対して敵意を抱かせようと熱心であった、親ラケダイモン派の人々の為に彼らによって滅ぼされないために彼らの支配権を転覆させようと望み、夷狄によって派遣せられたその人物が約束したように、大王の資金を手に入れることができれば、コリントス人やアルゴス人、それにアテナイ人が戦に加担すれば、というのはこれらの人々はラケダイモン人に対して敵意を抱いているので自分たちに手を貸して重装歩兵部隊を動員してくれるだろうから、それを行うのは容易いことだと考えたのである。(2) しかしそれを実行することについて熟慮してみるとそれを行うのは困難であると認めていたのである、というのはギリシアを支配しているラケダイモン人に対して戦争するようにテーバイ人もその他のボイオティア人も決して言いくるめられないだろうからである、それであらゆる手段を通して自ら戦争へと導いていこうとして、次のような事情が対立の原因であったので、フォキス人の一部の人々をヘスペリアと呼ばれるロクリスに侵入するよう説き伏せたのである。(3) これらの諸部族にはパルナッソス山付近に紛争地があり、これをめぐって以前から戦争を繰り返してきており、フォキス人、ロクリス人それぞれがしばしば相手側の土地で家畜に草を食わせてきたが、昔からもしどちらかの側がたまたま見つけると、もう一方の側が多数集まって家畜を奪い取ったのである。以前はこのようなことの多くがどちらか一方の側から引き起こされたとしても、常に互いに裁判や話し合いによって解決してきたのであるが、今回はロクリス人が失った家畜のかわりに略奪し返したのでフォキス人は直ちに、アンドロクレイダスとイスメニアス派の人々が仕向けた例の人々が彼らを煽り立てたので、武器を携えてロクリスに侵入したのであった。(4) 国土を荒らされたロクリス人はボイオティア人のもとに使節団を派遣してフォキス人を弾劾し、彼らに援軍を要求したのであった。というのは昔から彼らに対して友好的であったからである。好機を手に入れて喜んだイスメニアスとア

ンドロクレイダス派の人々はロクリス人に援軍を派遣するようボイオティア人を説得したのであった。フォキス人はテーバイからの知らせが彼らのもとにもたらされると再びロクリスから後退し、使節団を直ちにラケダイモン人のもとに派遣し彼らがボイオティア人に彼らの領土に入り込むのを禁止するよう要求したのであった。例え彼らを信用できないと思っていると言っていたとしても、それにも拘らず使節を派遣して、ボイオティア人がフォキス人に対して戦争を始めるのを許さないと、もし何らかの不正を被っていると見なす場合には、同盟諸国の前で償いをするよう命じたのであった。彼らを煽りたてそのような欺瞞と厄介事を企んでいた人々は、ラケダイモン人の使節らを何も為し得ないまま送り返し、自身は武器を取ってフォキス人に向かって進攻したのであった。(5) 彼らは急いでフォキスへ侵入し、パラポタミアイやダウリス、ファノテウスの領土を略奪し、町を攻撃しようとしたのであった。そしてダウリスに再び接近したが何事も為し得ないまま退却したが、僅かな打撃を被ったが、ファノテウスの郊外を強引に占拠した。それを手に入れた後彼らはフォキスへと前進して、エラティア及びペディエエア付近の平野の一部とそこに住む人々を蹂躪して撤退していった。彼らがヒュアンポリスから撤退する途中で彼らはこの都市を攻撃する決定を下した。しかしその地点はかなり強力であった。市壁に向かって攻撃し熱意に欠けるところはなかったが何も成し得ず、兵士のうち 80 名を失って再び退却したのであった。ボイオティア人は以上のようにフォキス人に危害を加えて自国領に戻っていった。」

クセノフォンと同じようにコリントス戦争を主導したのはイスメニ阿斯とアンドロクレイダス派であった。そして戦争への序章はロクリス人とフォキス人との国境紛争であったが、その国境紛争をイスメニ阿斯とアンドロクレイダス派が利用したのである。スパルタはフォキス人を支持し、ボイオティア人はロクリス人を支持したのである。

しかしクセノフォンと違う点はペルシアに買収されて戦争を始めたのではなく、国内に深刻な党派対立があり、敵対派がスパルタを利用して政権を転覆するのを予防することが目的であった。

Plut. Lys. 27. 1-4 :

「(1) 彼はアゲシラオスがアジアから帰ってくる前に、ボイオティア戦争に飛び込み、もしくはむしろギリシアを戦乱に投げ込んで亡くなった。というのはふた通りに言われている。ある人々は彼に責任があるとし、別の人々はテーバイの人々に、さらに或人々は両方に責任があるとしており、テーバイ人に対しては、アウリスの祭壇取り散らかしアンドロクレイダスとアンフィテオン派の人々が大王のお金に買収されてラケダイモンの人々に対するギリシア戦争を引き起こそうとしてフォキス人を攻撃し彼らの国土を破壊したことを非難している。(2) リュサンドロスについては、その他の同盟諸国が平静にしていたのに、テーバイの人々だけが戦利品の十分の一を要求し、リュサンドロスがスパルタに送った財物について立腹し、殊にアテナイの人々に三十人の独裁政治から自由になろうとする原因を提供したことにリュサンドロスが怒っていたと彼らは言っており、三十人政権をリュサンドロスが設置し、ラケダイモンの人々が恐るべき権力を彼らに与え、アテナイから亡命した人々をいかなる地からであれ連行すべし、抵抗する人たちは協定の外に置かれた者たちとして扱うという決議を行なったのである。(3) それに対してヘラクレスやディオニュソスの行為に似つかわしい似た決議を反対に決議し、ボイオティアにあるすべての家やポリスをアテナイ人のうちで必要とする人々に開放し、連れて行かれる亡命者に支援の手を差し伸べない者は1タラントンの罰金を払わなければならない誰であれボイオティアを通過してアテナイにいる独裁者たちに対して武器を持ち込む者には、テーバイ人は見もしないし聞きもしないと決議したのであった。(4) 彼らはこのようにギリシア人らしい人間味あふれる決議を行なったのは、文字面だけで画策したのではなく、トラシュブロスと彼と一緒にピュレーを占領していた人々は、武器や資金を整えるのを密かに着手するのに手を貸して、テーバイから行動を開始したのである。リュサンドロスはそれらのことをテーバイの人々に対して非難したのだった。」